

特集「ソフトウェア工学の理論と実践」の編集にあたって

羽生田 栄一[†] 満田 成紀^{††}

ソフトウェア工学は総合的かつ実践的な学問であり技術体系でもある。そこでは、単純に実践を目指せば問題が解決するという事は望めず、理論研究に基づくソフトウェアの基本原則と過去のシステム事例研究に基づく実証経験とを突き合わせ、産学が連携して総合的に真のソフトウェア工学を目指していくという根気強いアプローチが求められている。

情報処理学会ソフトウェア工学研究会では、ソフトウェアという複雑で興味深い対象に対するエンジニアリングの実質的促進を目的とし、領域を超えた産学の研究者・技術者・実務者間の有益な理論や実証経験を共有する場として、ソフトウェアエンジニアリングシンポジウム（略称 SES）を主催している。2006年10月に開催された SES2006 では、基調講演、チュートリアルならびにパネル討論からなる企画セッションに加えて、厳正な査読により採択された29件の一般講演からなるプログラムが生まれ、理論ならびに実践の双方から活発な議論を繰り広げることができた。

このように、ソフトウェア工学は学会員の関心の高い分野である。さらに、SES が謳うソフトウェア工学の理論と実践の融合をテーマとして、学会誌特集号を企画することは、研究を推進しその発展に寄与することとなり、情報処理学会にとっても大変意義のあることと考え、特集号を企画した。

本特集号では、対象分野はソフトウェア工学に関連した領域全般とし、基礎技術、開発/支援技術、実用的システム開発などに関する論文を募った。独創的な研究論文を採択することに加え、理論と実践の融合の観点から実用的な価値ある論文も積極的に採択する方針をとった。特に SES の発表者に限らず広く一般から公募したところ、2006年12月5日の投稿締切までに39件の論文投稿を集めることができた。特集号の編集にあたっては、SES2006 実行委員長の羽生田とプログラム委員長の満田がゲストエディタとなり、本テーマに関連する専門分野を持つ計15名からなる編集委員会を構成した。通常の査読と同様に論文1編につき1名の担当委員を割り当て、担当委員が選定した2名の査読委員の協力を得て厳正に査読を行った。

2007年2月と4月の2回の編集委員会を経て、計19件の論文を採択した。採択論文の内訳は、シンポジウム関連論文が8件、一般からの投稿が11件となった。双方の採択率に大きな差はなかったが、シンポジウムで発表された論文が、シンポジウムでの議論を受けることによって2カ月弱の短期間で論文誌採択レベルの論文へと高められた点が多く見受けられ、連携が上手くいっていることが確認できた。

本特集号では、当初の狙いどおり、ソフトウェア工学の理論と実践の融合を目指した基礎技術、開発支援技術などの最新の成果を編集できたと考えている。また、従来は組織内のノウハウとして閉じられていたものを、経験を抽象化し実用的な見地から論文としてまとめられたものを採録できたことの意義は大きいと考える。

最後になるが、本特集号をゲストエディタ制度によって企画する機会を与えてくださった論文誌編集委員会と、多数の秀でた論文を投稿くださった方々に感謝する。また、本特集号の編集委員ならびに査読を担当してくださった多くの方々に感謝したい。

「ソフトウェア工学の理論と実践」特集編集委員会

- 編集長（ゲストエディタ）
 - 羽生田 栄一（豆蔵）
 - 満田 成紀（和歌山大）
- 編集委員
 - 鯨坂 恒夫（和歌山大）
 - 上原 忠弘（富士通研）
 - 鷓林 尚靖（九工大）
 - 海谷 治彦（信州大）
 - 小林 隆志（東工大）
 - 坂田 祐司（NTT データ）
 - 紫合 治（東京電機大）
 - 白銀 純子（東京女子大）
 - 丸山 勝久（立命館大）
 - 山城 明宏（東芝ソリューション）
 - 山本里枝子（富士通研）
 - 鷲崎 弘宜（国立情報研）
 - 渡部 卓雄（東工大）

[†] 豆蔵

^{††} 和歌山大学